

科学技術の潮流

JST 研究開発戦略センター

⑩

性能以外の要件

人工知能（AI）技術の性能が高まり、さまざま応用が社会に広がっている。それにつれて、AI技術の性能を高める研究開発だけでなく、「社会におけるAIのあり方」を考えた研究開発が極めて重要になってきた。

前半から認識が高まり、それらを踏まえた「社会におけるAIのあり方」は現在、国・世界レベルの指針として検討・策定され、主



科学技術振興機構（JST）研究開発戦略センター
フェロー（システム・情報科学技術ユニット）
福島俊一
東京大学理学部物理学科卒、NECで自然言語処理・情報検索の研究開発に従事後、16年から現職。工学博士。11～13年東京大学大学院情報理工学研究科客員教授、18年から人工知能学会監事。
要20カ国・地域（G20）

AI開発

社会との関わり重要

首脳会議や経済協力開発機構（OECD）でも取り上げられるようになつた。

日本政府の「人間中心のAI社会原則」、歐州委員会の「信頼できるAIのための倫理指針」、米国電気電子学会（IEEE）の「倫理的配慮されたデザイン」など、「AIシステム」の視点で求められるのは、個人・組織の意思決定を支援するAI技術の強化である。安全性・公平性・透明性などの特有の問題も指摘されている。AI技術の強化で求められるのは、個人・組織の意思決定を支援するAI技術の強化である。情報の氾濫や偽情報（フェイクニュースやフェイク動画）の流通が人々の判断を惑わせ、國の指向性をもたらすが、という懸念が強まっている。AI

「人間」の視点で求める仕組みも欲しい。人間の指向性をもつた取り組みが重

り方に関する理論・技術による助言・支援が欲される。それらの指針では、呼ばれる新たなソフトウェア工学の確立である。機械学習はデータ

の例示によつてシステム動作を決める開発法で、手順をプログラムする従来の開発法とは根本的に異なる。プログラミング言語「人間」という二つの視点である。

「AIシステム」の視点で求められるのは、個人・組織の意思決定を支援するAI技術の強化である。情報の氾濫や偽情報（フェイクニュースやフェイク動画）の流通が人々の判断を惑わせ、國の指向性をもたらすが、という懸念が強まっている。AI

このように「社会におけるAIのあり方」の取り組みが、幅広い多面的に考え、主体的に判断する能力を高め、運用先を持つAI分野での我が国国際競争力の獲得につながると考える。

（金曜日に掲載）

「社会におけるAIのあり方」を考えた研究開発

